

プラトニーの美學(承前)

深田康算

九

「フェドロス」二四三E—二五七Bに於ける美の論は——「フェドロス」が已にプラトニーの對話篇の中最も優れたるもの、一であること、及び此個所が實に彼れの對話篇の中美に關する殆んど唯一の纏まりたる言説であることを外にしても、——吾々に取りて特に重要なものであると云はなければならぬ。何故ならば、美の基本的概念に就てのプラトニーの思想を窺ひ知る爲め吾々が辿り來たつた所の考案の辿り着いた足溜りに立つて、「フェドロス」に見えてゐる彼れの言説を檢査する時、吾々は恰も此個所に於て、上來論述せる總ての難問に對しての解決が——さうして更に又新たな問題が——提供せられてゐることを發見しなければならぬからである。上來論述せる總ての難問に對して此所に解決が提供せられてゐると云ふのは此所で「フェドン」に於けると同じく『美のイデア』の概念が其の原理として説かれて居るから

である。さうして此所に再び又新たな問題が提供せられてゐると云ふのは『美のアイデア』の觀念の導入が身體美に依つて規定せられて居るからである。

蓋し吾々が順次に〔著作年代に従つて〕はなく、吾々の敘述の便宜に従つて、『フレイボス』『ゴルギアス』及び『大ヒッピアス』を取つての考察から知り得た所は之れを二點に約することが出来る。即ち一方に於ては美は、『フレイボス』から『大ヒッピアス』に至つて漸次に其事例の範圍が擴大せられてゐること、單に純粹なる形式美的なるもののみならず身體美及び精神美までが美として數へ上げられてゐること、他方に於ては是等の種々なる美が果して、其自ら美なるものに屬するか否かは未だ明瞭には規定せられて居らぬこと、此二點である。さうして此二點は、『大ヒッピアス』の考察から特に著しく吾々の注意に上り來つた。其所では一方に於ては、視聽二覺を通して與へられる快感が盡く皆美なるべきことの述べられてゐると共に、他方に於ては、視聽二覺に於ける快感をして美たらしめ、兩者に共通に存在すると共に兩者の各にも存在する所の或一つの同じものが何であるかは語られて居らないのである。然るに、『フェドロス』に就て見れば此一つの同じものは『美』若しくは『美のアイデア』『To Kalos』であることが明瞭に語られて居る。加之此所では『美のアイデア』が他の總てのアイデアと異なりて獨

占してゐる所の特權若しくは特殊性さへもが指摘せられて居る。さうであるからして「フェドロス」に於ける美の論は一面に於ては上來論述せる總ての問題に對して解決を與へてゐるものと云へるのみならず實にプラトイの美學の核心を含むものとも云へる。然しながら其れと同時に此個所は他面に於て又新たな問題を吾々の前に展開する。若し「フェドロス」に於て語られて居る『美のイデア』が「フェドン」(一〇〇DE)に於けると全く同じく總ての美なるもの盡くを美たらしめる原理であるとせられてゐるならば——假令此の如き原理に依れる規定は、畢竟同語反覆に過ぎぬではないかと云ふ一應の非難があり得るに拘はらず、又如何にして美のイデアが其れ其れの美を美たらしめるかの點が明らかにせられぬ間は此の如き單なる説明は説明とは云へぬではないかと云ふ疑があり得るに拘はらず——吾々は少くも「フェドロス」の美の論を以て其儘直ちにプラトイに美學の核心であると見做し得る。併し「フェドロス」に於ける『美のイデア』は總ての美なるもの盡くに就て其原理として語られては居らない。寧ろ總ての他の美なるものを除外して唯人間の身體美のみに關する原理として説かれて居る。「フェドロス」に於て美と呼ばれて居るものは身體美であり、さうして唯身體美のみである。此點から見ればユトリウスワルターの云

つてゐる如くに (J. Walters, a. a. O. B. 297). 「フェドロスは「フィレボス」に對し又尙一層「シンポジオン」に對して明らかに矛盾してゐるとも云へる。「フェドロス」に於ける美の論が特に吾々の興味を惹く點は實に其所に在る。「フィレボス」と「ゴルギアス」と「大ヒッピアス」とに就ての考察から漸次に吾々が近づき來つた美の根本規定は「フェドロス」に於て明確に與へられて居る。然るに此根本規定は同時に又「フィレボス」から「ゴルギアス」を通して「大ヒッピアス」に至る間に漸次擴大せられ來つた美の範圍を全然轉覆して、美とは唯身體美のみであることの承認の上に於てのみ始めて可能なのである。プラトーンが此所で與へてゐる解決は恰も「ゴルギウス」が結目を解くものとも云へるであらう。ワルターが矛盾として指摘してゐる所のものは果して矛盾なのであらうか。假令それは表面上明らかに矛盾であるとしても少くとも實は所謂「悦ばしき矛と盾」とは云へないであらうか。

「フェドロス」の少くとも前半の主題は愛(希臘的愛)である。二四三E以下二五七Bに至るソクラテスの演述は、少年に對する愛(希臘的愛)が神的狂氣の四種類の一であることから出發して、少年の身體美に對する憧憬が美のアイデアの回憶に基くことを説き、愛する人 *erastikos* は其愛の故に彼自身の魂のみならず彼の愛人にも天界に翔り

上ぼるべき翼を其魂に得せしめること、従つて愛は吾々がイデアの世界に到り得る一つの途、哲學に依れる途の外に開かれたる他の一つの途であることを述べて居る。之に據れば愛する人、美を愛する人 *philein* は知を愛する人 *philon* と共に、彼の世に於て、眞實在を最も多く見ることの出來た魂が此世に於て宿つてゐる所の人々である(二八四D)。但し知を愛する人(哲學者)は彼れの眺めることを許された眞實在(正義)中庸「絶對知」智慧及び其他のイデアを明瞭に此世に於ても回憶して居る。愛する人、美を愛する人は其れを明瞭には回憶することが出來ない。其れを若しくは其等盡くを回憶することが出來ないけれども、地上の美の媒介に依りて彼は少くとも美のイデア(眞實在界に於ける「美」を回憶する。而して斯く回憶するに拘はらず明瞭には眞實在を回憶するとが出來ないからして、彼は彼の感ずる歡喜に對しては驚き怪むのである。彼が明瞭には眞實在を回憶し得ないのは、「正義」*dikaionoun* 中庸 *sofrosunē* 及び其他のイデアの光は地上に於ける其等のものゝ影像の中には明らかに輝いて居らず、是等の影像に對して直ちに其實在を回憶する人は稀であり、回憶することは難い、之れを能くするものは唯哲學者知を愛する人のみだからである。併し彼が不明瞭にもせよ眞實在を回憶し得るのは、彼が美を愛するからであり、美のイデアのみ

は其れの地上の影像の中に明らかに輝いて居るからである。「美を吾々は彼所に於て他の實在と共に輝いてゐるのを見た。さうして此所地上に於ても亦其れが吾々の感官の最も清明なる戸口を通して最も明らかに輝いてゐるのを吾々は見ることが出来る。蓋し視覚は吾々の感覺の中最も明敏なるものだからである。智慧 *sophia* は然しながら、視覚を通しては見らるべくもない。若し智慧及び其他のイデアの明瞭なる影像が視覚に向つて與へられたならば其愛らしさ其が吾々の愛情を刺戟する力は恐らく吾々に取りて堪え得難き程のものであるであらう。美若しくは美のイデアの特權は之に反して其れが最も愛せらるべきもの(吾々の愛情を最も強く惹起せずしては止まぬもの) *ἐρασιμώτατος* であると共に又最も見られ得べきもの(最も能く視覚に依りて捕へられるもの) *εὐπασιμώτατος* たることに在る(二五〇〇D)

此個所に於ける言説からして吾々は先づ第一には美しきもの(此場合に於ては美しき少年の身體)の有する意義は其所に或精神的なるものが可視的となり得る點に在ること、さうして或精神的なるものとは『美のイデア』なることを知る。或ものが美であるのは、さうであるからして、一方から云へば、之れを媒介として精神的なるものへ吾々を向はしめんが爲めであると云へると共に、他方から云へば、美であること

は即ち美のイデアを回憶せしめることに外ならないのであるからして、美なるものが美のイデアを従つて自ら他の總てのイデアを回憶せしめる手段であると云ふよりは、寧ろ美なるものが美たる所以は美のイデアの回憶に在ると云はなければならぬ。美なるものはイデアの一般の回憶に向はしめると云ひ得ると共に其れは又美のイデアの回憶に外ならぬものと云へる。美なる現象はイデアへの途哲學と相並ぶ所の他の一つの途であるとして云へると共に、美なる現象の美なる所以は美のイデアに分與すること（フェドン）一〇〇 参照に在ると云へる。此二つの見方——美なる現象の意義を其れが精神的なるものへ導く爲めに有する役目に在ると見做す所の教育的若しくは道德的若しくは又主知的見地と美なる現象を規定する爲めに美のイデアを以てする所の美學的見地と——云はゞ其效果の上から美を規定しようとする見方と其本質の上から之れを規定しようとする見方と——此二つの見方が相混じてプラトンの此所で與へてゐる美のイデアに依れる美の規定の中に含まれてゐることは云ふ迄もない。然しながら吾々が今此所で特に注意したいのは此後者の見方である。之に據れば美なるものゝ美なる所以は、最も愛せらるべきものであると共に又最も見られ得べきものなる『美のイデア』に分與することに在る。否彼

は是に分與すると云ふよりは寧ろ『美のイデア』が最も見られ得べきものとして、美なる現象に於て其自ら明瞭に輝き顯はれるのである。『美のイデア』とさうして其特權なる可視性とを明確に述べてゐる此個所はさうであるからして、其れが明白に身體美に限つてのみ語られてゐる點を暫らく措くならばさうして可視性を擴めて具象性の意味に取ることが許されるならば『フレイボス』及び『ゴルギアス』に於ける言説に對して何等矛盾するものでないのみならず、其等に於て斷片的に語られてゐるに止まる所のものゝ根本的思想が此所に始めて見出されると云ふべきであらう。「大ヒビ」アスに於ける言説に對して之れを較べて見るならば、尙一層吾々は彼に於て未だ語られざりしものが此所に於て始めて十分に語られてゐることを認めなければならぬ。何故ならば「大ヒビ」アスに於ては未解決のまゝ殘されたる美の原理は此所に於て明らかに『美のイデア』に依つて與へられてゐるからである。さうして觀照的と云ひ知覺的と云ひ感覺的と云ひ具象的と云ふ語が其れ其れ有してゐる三通の意味の中美學に取りて最も重要な一つの意味は此所に始めて與へられてゐると云ひ得るからである。『美のイデア』に就て其れが可視的であると云はれてゐる限り、知覺的と云ひ感覺的と云ふ語に附隨して起り得べき廣狹二様の解釋が美學的には何等

の意義なきものであることは明らかであると共に、観照的と云ひ具象的と云ふ語の（美學的に）正當なる意味が又同じく明らかでなければならぬ。「大ヒビアス」に於ては美其もの、若くは如何なる場合如何なる人に取つても醜とは見えることなき如き美、若しくは總ての美なるものをして美なるものたらしめる美は語られて居るのであつた。併し其の美は或は視聽二覺を通して與へられる快感であるとせられ或は視聽二覺に於ける快感であるとせられることに依りて、感覺的若しくは知覺的なる語の廣狹何れか一方の意味にのみ取られるに止まつて居るのである。さうして遂に視聽二覺に於ける快感をして美たらしめ、兩者を共通に存在すると共に兩者の各にも存在する所の或る一つの同じものがなければならぬことに歸着したのであつた。其所に要求せられた所の「或る一つの同じものは然るに「フェドロス」に於て始めて『美のイデア』として與へられてゐるのである。

さうであるからして吾々は「フェドロス」に於ける美の論に就いての考察の結果を次の様に約説することが出來やう。

「フェドロス」殊に二四九D——二五〇Dに於ける美の論は「フィロス」「ゴルギアス」及び「大ヒビアス」に見えてゐる美の論に對して根柢を與へるものであり、彼等に於て

或は其自ら美なるもの或は觀照に於て已に快感を與へるもの或は視聽二覺に於て與へられる快感として規定せられてゐる美は、此所に於て『美のイデア』として規定せられることに依り究極の(其れ以上説明することの不可能なる説明が與へられて居る。而して『美のイデア』そのものが最も可視的具象的)であると規定せられてゐることに依りて、觀照的と云ひ感覺的と云ふ諸規定は此所に於て始めて其最も深い意味を與へられて居る。——上來吾々の考察し來つた所からさうして吾々の知れる限りに於て敢て云へばプラトンの全體を通じて吾々は、フェドロスに於てプラトンの美學の核心が見出されると云ひ得る。と。

然しながら、上にも云つた通り、フェドロスに於ける美の論には、其れが他の總ての美の事例を除外して唯一つの身體美のみに就て語られてゐると云ふ一つの大きな制限が附纏つて居る。此一つの制限の故に、フェドロスに於ける美の論は、其れが其自らとしては愈深いものと見られ得る丈け、其れ丈け『フレイボス』との矛盾が愈目立たなければならぬ。『フェドロス』に於ては身體美が美なるもの、唯一の事例として論ぜられてゐるのに、『フレイボス』に於ては抽象的なる幾何學的形式等が、其自ら美なるものとせられてゐる。加之總ての美なるものが『美のイデア』の分與に依りて美なる

ことは「フェドロン」に於て言及せられてゐるに止まり、總ての美なるものが其れ其れ皆「美のイデア」の分與に依りて美なるべきことは何處にも論ぜられては居らない。又「フェドロス」に於て高調せられてゐる身體美は「シンポジオン」に於て高調せられてゐる精神美と矛盾することもワルターの指摘して居る通りである。加之「フェドロス」に於てさへ上に述べた如く、二つの異なる見方が美のイデアに依りての美の現象の規定の中に含まれて居る。さうして又内的美と外的美 *καλὸς τανόθεν* — *ἐξ αὐτοῦ* — 七九〇とが區別せられて居る。——是等の所謂矛盾（其中の或もの例へば「フレボス」と「フェドロス」との間に存する矛盾の如きは已に述べた所）——前掲二からして容易に解決されるであらう（解決する爲めに吾々は一方にては身體美と其他の美との關係を、さうして他方に於ては特に身體美と精神美との關係を明らかにしなければならぬ）。此二點はしかし畢竟プラトイに取りて身體美は如何なる意義を持つかの問題に外ならないであらう。（未完）